

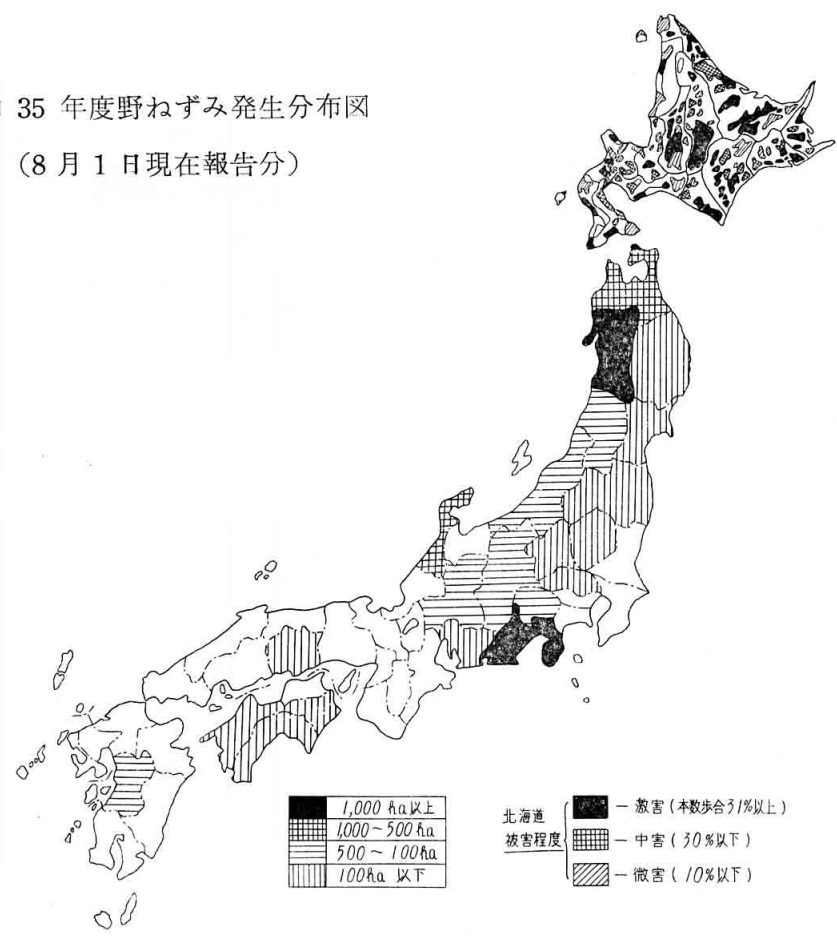
森林防疫ニュース

編集 林野庁

発行 全国森林病虫獣害防除協会

1960. 9. 1

昭和 35 年度野ねずみ発生分布図
(8 月 1 日現在報告分)



目 次

観 察

カバ類の 2, 3 の病害.....	浜 武 人...	2
ネツコ (クロベ) の天ぐす病.....	浜 武 人...	5
スギノアカネトラカミキリの天敵アリガタバチの一種について.....	岡 田 武 次...	6
高知県の西部におけるムササビの被害について.....	弘 田 俊 三	8
	岡 政 武	
刊行物紹介.....		10

観 察

カバ類の2,3の病害

浜 武 人

長野県木曾谷においてはヒノキの伐採跡地へ一時的にカバの類を天然更新によつて導入を計り、林地改良に役立たしめようとするような気運がある。たまたま長野営林局からカバ類の病害について照会があつたのを機会に、幼苗に被害の多い褐斑病と、広く壮令木に被害のみられる葉さび病、ならびに被害程度は軽微と思われるが最近管内で採集された特異な形態を示す天ぐす病の3種類について概要をのべる。

1. シラカバ、ダケカバ、ウダイカンバの褐斑病*

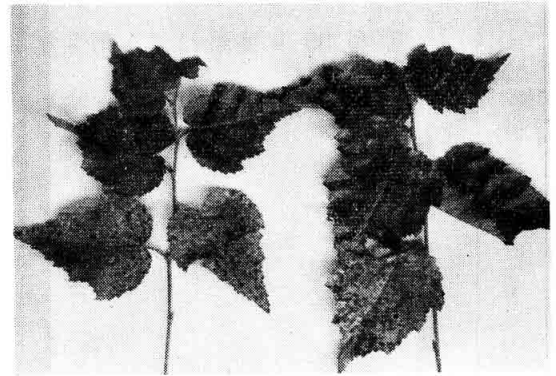
昭和34年5月上旬、林業試験場木曾分場造林研究室において、精英樹選抜に関連して採集したシラカバ、タケカバ、ウダイカンバの3樹種を、長野県西筑摩郡日義村大原苗畑へ試験的に4×4の配列でそれぞれ16m²づつまき付したところ、発芽および生育は順調のようで7月下旬にはシラカバ約30cm、ダケカバ約15cm、ウダイカンバ約10cmに達したが、これら3種の幼苗に8月上旬から9月上旬にかけて、葉に斑点ができ変色する病害が発生し、依頼により調査したところこれらはいずれも後述するような褐斑病による被害であつた。この樹種別の病徴ならびに被害状況は次のとおりであつた。

病徴ならびに被害状況

3種類の中では、シラカバの被害が最も著しく、ダケカバは一部分、ウダイカンバは軽微であつた。まずシラカバの病徴についてみると、8月5日、一部の苗の下葉に褐色円形の小斑点があら



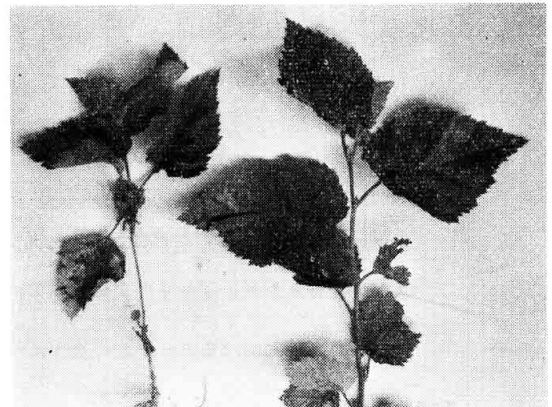
第I図 苗畑において褐斑病に罹病したシラカバ (当年生) 長野 大原苗畑 (1959. 8)



第II図 シラカバ褐斑病



第III図 苗畑において褐斑病に罹病したダケカバ (当年生) 長野 大原苗畑 (1959. 8)



第IV図 ダケカバ褐斑病

* 病原菌は *Septoria chinensis*

われ、これはしだいに拡大融合しやがてこの部分には肉眼で認めうる黒粒点が形成されるにいたり、これと共に葉の色は黄褐色に変じ、病状はやがて上部の葉にもあらわれ、まわりの苗にも波及して、9月上旬には16m²のまきつけ床中、12m²にこの状態がみられるようになり、やがて9月中～下旬には早期の落葉がひきおこされるにいたつた。

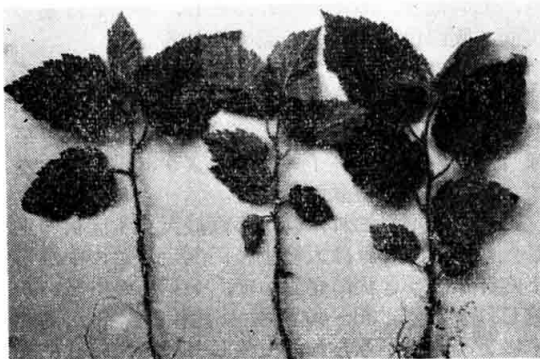
なお、最初に被害の発生した場所のシラカバは、8月中旬一部すでに落葉がみとめられ、8月下旬にはすでに大半が落葉して、あたかも晩秋をむかえたごとく棒立ちの惨状がみられた(第I、II図)。

これに対しダケカバに被害のみられたのは9月上旬であつたが、被害の出かたは、はじめ黄褐色の小斑点が下葉にあらわれ、これは拡大すると同時に黄褐色に変化し小黑点の形成されることなど、シラカバの病徴によく似ているが、葉色の変化はシラカバほど顕著ではなく、9月中旬みられた落葉も下葉だけに止まつているようで、被害程度も16m²中3m²という状況であつた(第III、IV図)。

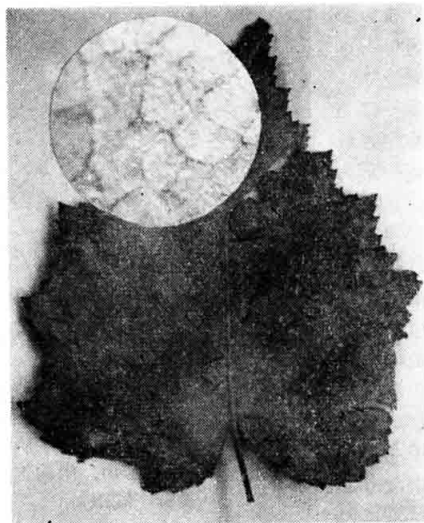
次にウダイカンバは、ダケカバと同じく9月上旬最下部の葉に褐色の斑点があらわれ、これはいくぶん拡大がみられ小黑点も認められたが、三樹種の中でも被害は最も軽微のようで、16m²のま



第V図 苗畑において褐斑病に罹病したウダイカンバ(当年生) 長野 大原苗畑 (1959.8)



第VI図 ウダイカンバ褐斑病



第VII図 シラカバのさび病(裏) 一夏孢子堆がたくさんみえる一 (長野 大門)



第VIII図 同(表)

き付床中この褐斑のあらわれたのは1m² だけであつた。しかし、9月下旬下葉は若干落葉した(第V、VI図)。

以上は3種類のカバを試験的にまき付した苗床に、たまたま発生のみられた褐斑病のあらましであるが、このカバ類を12月中旬掘取りしたところ、7月中旬の調査数に対し、シラカバは約1/2、ダケカバ約2/3(ウダイカンバは馬にふまれて不明)という得苗数であつた。シラカバの落葉は普通10月下旬～11月上旬であることから、8月下旬というような早期落葉はたとえ枯死にいたらなくても、樹勢の衰退をまねき影響は甚だしいものと考えられる。

2. シラカバのさび病*

病徴

シラカバはさび病におかされると、最初葉の裏全体に黄色い斑点ができて、これは葉脈にそつて次第に拡大ゆう合するとともに、この部分には、やがておびただしい黄色の夏胞子を生ずるようになり、さらに秋期にはこの部分に淡褐色臘質の冬胞子堆が形成され、葉は次第に乾固してもろくなり、被害程度のはなはだしいものから落葉がみられるようになるが、長野県下2, 3の場所でシラカバの壮令木についてしらべたところによると、葉に変色の目立つようになる時期は、9月上・中旬頃で、これはしだいに黄色をまして10月中下旬にはこれが一層顕著になり微細な夏胞子を肉眼でも認めることができるようになる(第Ⅶ図)。

そして、この被害は比較的下層の葉に目立つが、罹病葉は直ちに落下することなくこのまましばらく附着して、10月下旬~11月上旬に落葉がみられるようになる。

3. シラカバの天ぐす病**

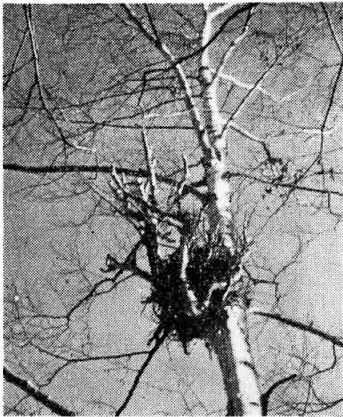
カバ類の天ぐす病については宮部博士によつてダケカバの天ぐす病が報告されているだけである(原氏はこれをドスカンバという別名で報告している)。最近、これをシラカバの天然林中でみいだしたので、この病態についてお知らせする。

病徴

天ぐす病によるシラカバの被害部は、1カ所から小さい枝がほうき状に多数発生し、この病枝に

* 病原菌は *Melampsoridium betulinum*

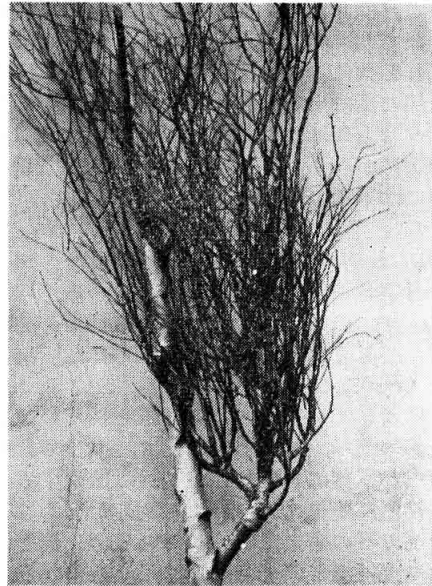
** 同上 *Taphrina betulicola*



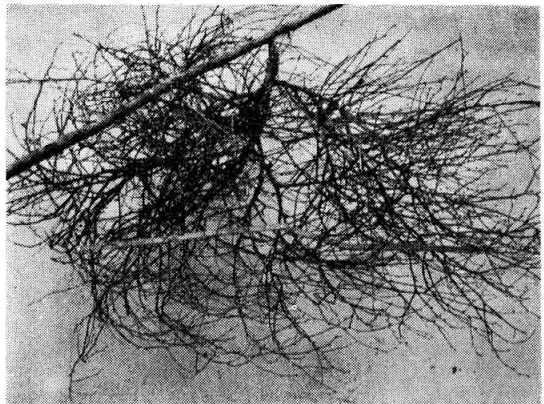
第Ⅸ図 シラカバ天ぐす病 (主幹型) (長約2m, 巾約1m) (長野 間田)



第Ⅹ図 シラカバ天ぐす病 (頂端型) (長約3m, 巾約2m) (長野 木租)



第Ⅺ図 シラカバ天ぐす病 (側枝型) (長約3m, 巾80cm) (長野 奈川)



第Ⅻ図 シラカバ天ぐす病 (下垂型) (約1.5x1.5m) (長野 木租)

生ずる葉はふつうのものよりやや小さく、時にちぢれていたり、ふくれてわん曲し、しばしば葉の裏面に灰白色の粉状物が認められる。

なお私のしらべたところでは、シラカバの天ぐす病は、発生部位によつて主幹型(第Ⅸ図)、側枝型(第Ⅺ図)、頂端型(第Ⅹ図)、下垂型(第Ⅻ図)の四つのタイプがあるように思われるので、おのおのの特徴をのべる。

1. 主幹型 これは幹から直接天ぐす症状の生じたもので、これは大枝小枝が混生しこの中から不定芽がほうき状に発生して、一見鳥の巣という感じのする型。30~40年生の比較的樹令が高い木によく発生がみられ、混生している大枝は枯れているものが多い。

2. 側枝型 主幹からいつたん分岐した小枝に、天ぐす症状のみられるもので、これは下垂することなく枝ののびている方向がそのまま天ぐす病となるもので、一部に枯枝が混生する。

3. 頂端型 これは樹冠の先端部全体がほうき状になつて天ぐす症状をなすもので、この型のあらわれた被害木は大変生長が悪いことから樹勢に

対する影響は4つの型の中では最もいちじるしいように思われる。

4. 下垂型 これは他の樹種にもよくみられるような一般的の天ぐす型で、主幹から出た枝に天ぐす病が発生して下垂し、しかも病枝全体はほぼ球形を呈するものである。

(林業試験場木曽分場保護研究室)

ネヅコ(クロベ)の天ぐす病

浜 武 人

青森、石川県などのヒバ林にきわめて多く発生しているヒバの天ぐす病は、ケオマ、デホームズ (*Caecoma deformans*) とよばれるさび菌の一種によつてひきおこされるものであることはよく知られている。しかしこの菌がネヅコ(クロベ)にも寄生して同じような天ぐす病をおこすことは一般にはあまり知られていないようであり、また従来数多く発行されている樹病関係の書物をひもといてみても、多くは名前だけがのつてることが多い。たまたま、木曽谷でネヅコに発生した実例があつたので、この概況を被害写真をそえてお知らせする。

1. 被害発生状況

昭和 34 年 4 月 17 日、長野県西筑摩郡福島町

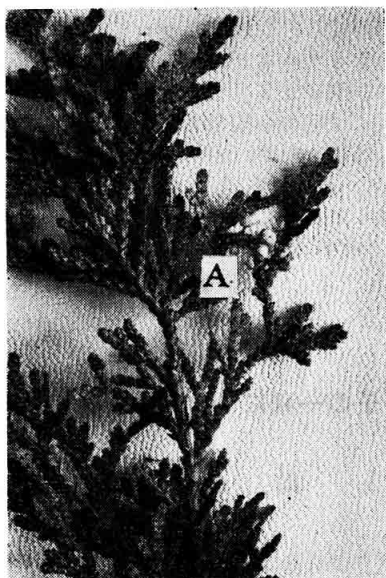
鳥居地籍上村金治氏所有林内にある 20 年生前後のネヅコに、附近の学生が奇妙な病枝をみつけたと木曽山林高校の佐々木先生のところへ持ちこみ、これが、私共の研究室へまわつてきた。この時届けられたものは直径 5cm ほどのものであつたが、明かにこれは天ぐす病の病状を示していた。翌日この学生の案内で採集したという近くをくまなく調査してみた。

現地は福島町から南へ約 1 km ほどいつた西南に面した小さな谷間で、10~50 年生にわたるネヅコが密生していたが、手入の不十分なためか、林内はうす暗いような場所であつた。

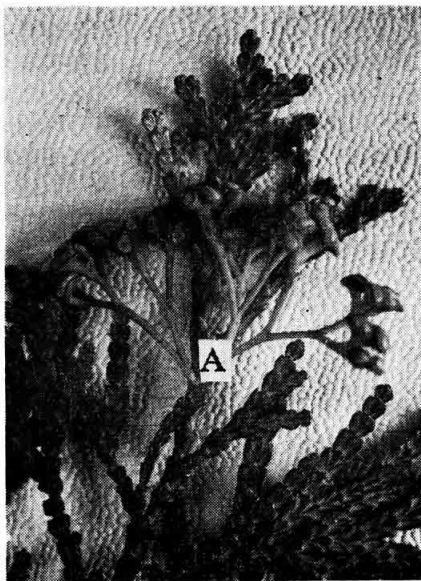
調査の結果は意外にも 0.1ha におよぶ区域のネヅコ林中数十本にわたつて天ぐす病樹がみられ、特に民家に近い竹やぶの中にある高さ 15m 内外、約 40 年生のものからは、直径約 50cm に及ぶ完全な天ぐす病枝(地上約 2m の力枝中間附近)を採集することができた(第Ⅳ図)。

2. 病 徴

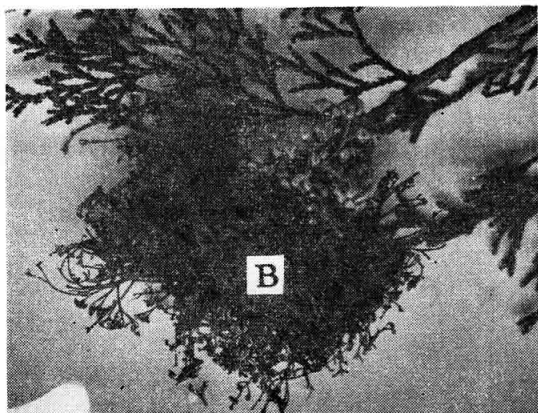
ネヅコの天ぐす病は、ヒバのそれに似ているようであるが、1カ年にわたつて観察してみたところ、本病は最初、ネヅコの鱗葉の間に小さい緑色の突起ができ、これは次第に大きくなると同時に二叉に分れ(第Ⅰ図)、8~9月の頃その頂点がクギの頭状になり、上面の中央部は少し凹んで浅い皿状になる。皿状のま



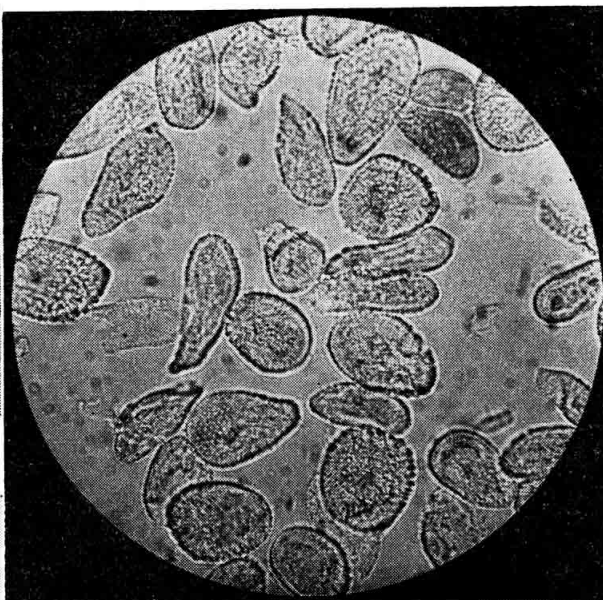
第Ⅰ図 ネヅコの天ぐす病発生初期
(A) (長野 福島 1959.4)



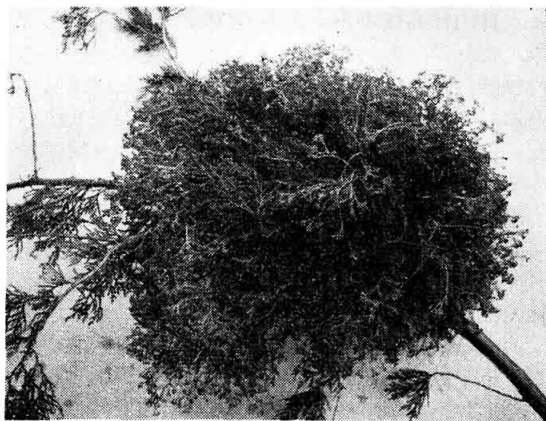
第Ⅱ図 ネヅコの天ぐす病部が分岐して大きくなつたところ
(A) (長野 福島 1959.4)



第Ⅲ図 ネヅコの天ぐす病部が伸長し一部枯死したところ(B) (長野 福島 1959.4)



第Ⅴ図 ネヅコの天ぐす病菌(×605)(長野 福島 1959.4)



第Ⅳ図 伸長に球形をなしたネヅコの天ぐす病 (長野 福島 1959.4)

わりには針頭大の粒点を排列する，翌年4月頃この粒点から粘質物を出し中央の皿状部も次第にもり上つて，5月にはいつて橙黄色になり表皮が破れて黄粉(さび孢子)を飛散するようになる。なおこの突起は毎年生長して次第に大きな集団となり(第Ⅱ図)，これを遠望する時はヤドリギの状態を示すが，大きくなると天ぐす病病患部が枯死

して乾固する例がしばしば認められた(第Ⅲ図)。

本病の寄生によつて枯死したネヅコは今のところ見あたらないが，高さ10m内外，15年生前後のものに十数カ所も天ぐすが発生している例があつたから，時には樹勢の衰退が予想される。

3. 防 除 法

このさび菌は，ネヅコの組織内においてさび孢子の菌糸体で越冬し，年々天ぐすをつくり，これにさび孢子を形成し，これがネヅコからネヅコへ直接伝染するようであるが，福島町の例から考えると，このさび孢子は5月ごろ形成されるから，4月以前に天ぐす病枝を切りおとし焼却することが必要と思われる。なお，密林で日光の透射，空気の流通の悪いような林地には発生しやすいから，除伐間伐などよく行う必要がある。

(林業試験場木曾分場保護研究室)

スギノアカネトラカミキリの天敵アリガタバチの一種について

岡 田 武 次

和歌山県紀南地方のスギ，ヒノキの「とび腐れ」について調査中のところ，一種のアリガタバチを採集することができたので，これについて現在までに観察したことを報告する。

スギ，ヒノキの「とび腐れ」については昭和33年より当該において調査研究を進め，既にその一部を発表(玉置五三：紀南におけるスギ，ヒノキの「とび腐れ」の蔓延について。日本林学会関西

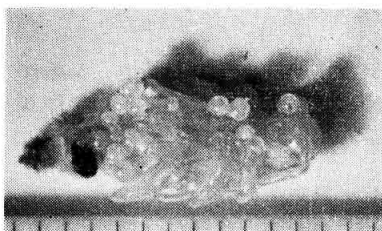


写真1 スギノアカネトラカミキリの
蛹に産卵したアリガタバチの卵

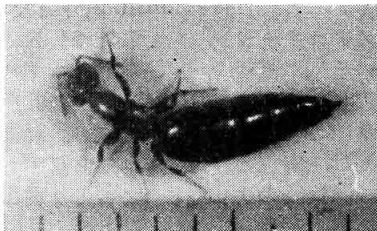


写真2 アリガタバチ

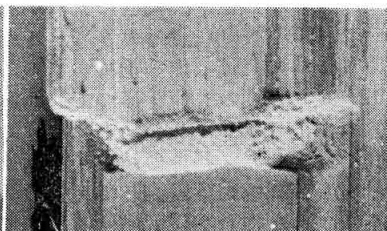


写真3 アリガタバチの孔道(白い粉
はスギノアカネトラカミキリの孔道)



写真4 アリガタバチの幼虫
(寄主はスギノアカネトラカミキリ幼虫)

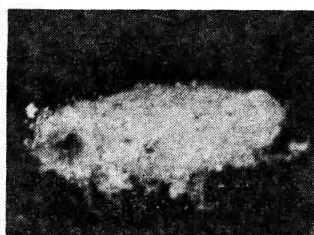


写真5 アリガタバチのマユ

支部大会講演集 1958) したのであるが、その後、この「とび腐れ」の主原因となるものはスギノアカネトラカミキリであることが判つたので、現在その生態調査を進めている。

この生態調査の一方法として、幼虫が寄生しているスギ、ヒノキの枝の一部(15~20cm)を採取し、三方コンクリートの約半坪の部屋に置き、定期的に割材していた。たまたま昭和34年6月頃採取した枝144本を調査するため、7月7日割材したところ、カミキリの幼虫は完全に斃死しており(今日までの数回の幼虫飼育において珍らしいことであつた)その幼虫(写真では蛹)に写真(1)に見るような何かの昆虫の卵らしいものが産みつけられ、更に又幼虫の孔道内に写真(2)の昆虫が発見されたので、早速、九大安松教授に同定をお願いしたところ、アリガタバチ(*Scleroderma*. sp.)という回答を得た。その後8~9月にわたつて逐次割材したが、殆んどこのアリガタバチのためにカミキリの幼虫が斃死しており、採集した幼虫で蛹化したものは2頭のみという結果になつた。

その後、本県の西牟婁郡日置川町川添及び東牟婁郡古座川町月の瀬において「とび腐れ」の調査を行つていたところ、スギノアカネトラカミキリの孔道内で本虫を発見した。このように可成り広範囲にわたつてこのアリガタバチが、スギノアカネトラカミキリの天敵として存在しているのではないかと思われる。

有賀技官は、クロアリガタバチが人体を刺すことを紹介されているが、(防疫ニュース, Vol. 8, No. 7, 人体を刺すマツザインバンムシの寄生蜂クロアリガタバチについて)本虫も同じく人体を刺した(同室の職員が腹などを刺され、皮膚が0.5~1.0cm程度の円形に膨れ、数日間痛痒を訴えていた)。

このアリガタバチは、体長3.0~4.0mm程度



写真6 スギノアカネトラカミキリの成虫♀
体長 12m/m

で、全体が黒色～黒褐色で光沢がある。

これは写真(3)に見るように、スギノアカネトラカミキリの孔道(白い粉でつまっている)に直径0.5mm程度の孔道を穿つて追跡進入し、スギノアカネトラカミキリの幼虫及び蛹に産卵して、孵化したアリガタバチの幼虫(写真4)が、寄主の幼虫及び蛹を食害吸血して生長の後、写真(5)のようなマユを作り羽化脱出するようである。

筆者らによつて観察した記録をたどると次のようである。

7月13日

割材した標本材よりアリガタバチがスギノアカネトラカミキリの幼虫に産卵しているのを発見した。卵の直径は0.2mm内外で黄白色の光沢がある。なおそれを鋸屑を入れた飼育瓶に移して観察を始めた。

7月18日

アリガタバチは孵化して1.5mm内外の乳白色の幼虫となり、その後、幼虫は生長を続け3.5

mm内外となつた。

7月24日

寄主(スギノアカネトラカミキリ幼虫)を離れて、寄主の孔道内で黄白色マユ(写真5)を作り蛹化する。蛹期は比較的長いようである。

8月9日

マユより脱出して黒褐色の成虫となる。

以上のように、ただ一回の観察だけで詳しいことは判らないが、その世代は非常に短かく、従つて繁殖も急激に行なうようである。

現在進めているスギノアカネトラカミキリによる「とび腐れ」に関する研究過程において、このアリガタバチの天敵としての効用は、防除対策上の一つの問題として面白い存在である。

終りに、常に御指導を頂いている東大日塔教授、農林省林業試験場関西支場中原技官並びに観察に御協力を頂いた井戸規雄君に厚く御礼申上げらる。(和歌山県林業試験場)

高知県の西部におけるムササビの被害について

弘 田 俊 三*

岡 政 武**

まえがき

ムササビが、木の実や、若芽、樹皮に食害を加えることは、聞いていたのであるが、本県の西部地方(宿毛市、土佐清水市近辺)のように、集団でしかも生長旺盛な造林木を多数加害し、ひどい所では30~50%の食害を与え、枯死さすような被害は稀れであるので、その概要を紹介してみたいと思う。

被害状況

本県におけるムササビの被害発生地は、宿毛市から土佐清水市にまたがる造林地で、特にヒノキの一斉林で10~30年の生長旺盛な林分が激しい被害を受けている。

被害の時期は冬期12月下旬頃から2月中旬迄の間(ムササビの食いのない時季)に加害するようである。加害されたヒノキは、4月から5月にかけて林内で点々と赤く枯れ始め6月から7月になれば被害が目につくようになる。被害の部位は、殆んどが梢端部の2~3m位の間を巾約20cm木質部に至るまで環状に剥皮しているので樹液の流動に支障を来し、自然に梢端部が枯死してい

くものと思われる。稀に下枝部や胸高の部位を食害しているものもあるが、それ等は全体の被害歩合から見れば非常に少ない。

そのように加害されたヒノキは梢端部の枯損のみで生長は続けているが、用材として著しく利用



写真1 被害林分
被害林分の下草は殆んど羊歯が繁殖している

森林防疫 ニ ュ ー ス



写真2 被害は梢端部より2,3m下の部位を食害されている(被害部よ上部は枯死していく)。



写真3 2, 3年の被害で樹皮が巻き込みつつある。

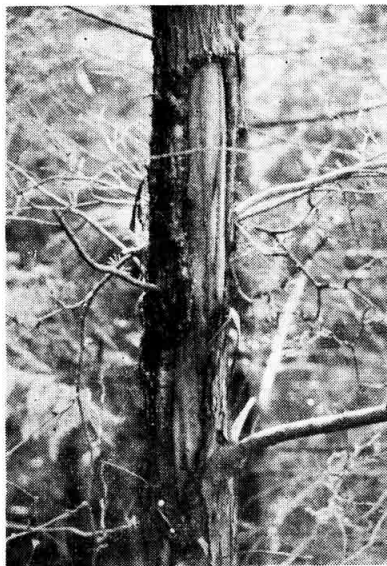


写真4 5, 6年前に食害されたものは、既に樹皮が巻き込んでいる。



写真5 数年前の被害で、被害部位から不整枝が出ている。

価値を低下させている。

この被害は数年前より散発的に発生していたのであるが昨年より急激に上昇して激しい林地は全林分の50%に近い被害が出ている。

この調査において、激害は枯死か又は、かろうじて生育をしているもの、中害は相当な被害を受けているが現在では、皮が巻き込んで生長を保っているもの、微害は5~7cm以内の食害のもので生長には比較的影響のないものを、基準として調査をした。

被害地で特に感じられること

スギ、ヒノキの混交林においてはヒノキは相当ひどい被害を受けているが、スギの被害は全くないと云うことと、被害地の下草は殆んどが羊歯地であると云うことである。今春この被害地付近で造林地の地拵中(2町歩の羊歯地)ムササビ6頭を捕獲した例から見ても如何に生棲密度の多いかがわかることと思う。

防除対策

このムササビは夜行性の動物であることと捕獲しても食用肉に乏しく、従つてハンターが他の獣類のように、あまり好んで捕獲しないことと又夜間の銃猟は禁じられている関係で、これの駆除は非常に困難である。上記地区で本年2月に被害関係者並びに猟友会員が共同で昼夜にわたり駆除作業を行ったが僅か数頭を捕殺したのみであった。

現在駆除の方針としては、

被害林分の状況

番号	被害調査地	調査面積	林令	生立本数	被害本数	被害程度別内訳			生立本数に対する被害の歩合 %
						激本	中本	微本	
1	宿毛市小筑紫字都賀ノ川	0.56	年18	1,356	670	115	221	334	49
2	宿毛市大字和田	1.20	20	2,925	1,053	207	413	433	35

森林防疫 ニ ュ ー ス

ムササビの好んで棲息する環境である下草の羊歯を毎年刈り取るよう指導している。

なお、昭和34年度狩猟期間中において宿毛市、土佐清水市等5カ市町村のムササビ捕獲数は625頭であつた。

(*高知県林業課
**高知県宿毛地区主任 Ag.)

刊 行 物 紹 介

- 日林会 日本林学会大会講演集(第69回)34年4月
高井 省三:紫紋羽病菌の代謝生理に関する研究(第1報)
本菌の産生するフェノール性物質の単離(予報)
- 安部卓爾・葉 貞聡:シナ油桐(*Aleurites Fordii* HEMSEL)果実の黒腐病(新称)について
- 野原勇太・児玉武男・青山安蔵:ポプラの銹病の防除に関する研究 薬剤防除試験について(予報)
- 千葉 修・陳野好之:マツ葉フルイ病菌の子嚢胞子の形成時期と放出条件について
- 魚住 正:モミ属の *Adelopus* 菌について(予報)
- 遠藤 昭・渡瀬 彰:ヒノキのトックリ病と土壤の理化学性
- 横沢 良憲:カラマツ先枯病(*Physalospora laricina* SAWADA)に関する研究(第II報)
- 佐藤邦彦・庄司次男:秋田地方に発生するスギのおもな枝枯病類3種(予報)
- 伊藤一雄・小林享夫・林 弘子:カラマツ「こぶ苗」病の研究(予報)
- 野原勇太・佐藤絵美:針葉樹稚苗の立枯病防除に関する研究
- 千葉 修・小林享夫・陳野好之・魚住 正:針葉樹稚苗立枯病の発病条件に関する研究(予報)立枯病罹病苗から分離した *Fusarium* 属菌各系統の諸性質の比較
- 四手井綱英・赤井竜男:針葉樹稚苗の立枯病に対するミクロフロラのコントロールについて(2)
- 横田 俊一:トドマツ生立木の根に対するマツノネクタケの接種試験
- 亀井専次・福原洋祐:イチイ生立木の心腐れ腐朽について
- 青木明治・深沢和三・町井 茂:ブナ丸太材に有機水銀剤を Spray coating したものの防腐防虫効果について

- 岩村 通正:マツタケの害虫について(第VII報) 燻煙剤など薬剤による害虫の防除
- 川崎俊郎・伊藤勝夫・加藤幸雄:BHC燻煙剤に関する基礎研究 煙霧の濃度測定についての試験法
- 加藤幸雄・川崎俊郎・伊藤勝夫:燻煙剤に関する基礎研究 マツケムシに対する燻煙剤の効果
- 四手井綱英・古野東洲:アカマツ苗の摘葉試験(1) マツカレハ被害の模型試験(予報)
- 菊谷 光重:カラマツ幼令林の摘葉がその年の生長におよぼす影響
- 有賀 好文:ハラアカマイマイ (*Lymantria fumida* BUTLER)の生態に関する研究(第2報)
- 中原二郎・小林富士雄:カラマツヒメハマキ(*Spilonota laricana* HEINEMANN)の生活史
- 渡辺 哲夫:筈の害虫ハジマヨトウによる被害並びにその発生経過について(1)
- 伊藤 武夫:信州でカラマツを食害するハバチ類について
- 加辺 正明:邦産 *Dryocoetinae* の食痕の研究
- 山口 博昭:ヤツバキタイの再寄生について
- 斎藤 謙・小島圭三:スギノアカネトラカミキリの幼虫の生態と形態
- 日塔正俊・小田久五・加藤幸雄:マツ類の穿孔虫に関する研究おもな種類の発育経過
- 日塔正俊・小田久五・加藤幸雄:マツ類の穿孔虫に関する研究 枯損形と被害木の発生経過
- 奥村大六・大屋襄二・東口精耕:BHCによる播種木の鳥獣害防除ならびにBHCの薬害について
- 京都府立大学農学部 京都府立大学学術報告 第11号
- 葉 貞聡・柱 琦一:アラカシ *Quercus glauca* THUNB 葉の新病「輪紋葉枯病」とその病原菌について
- 笹川満広・脇田誠三:アカマツ穿孔ゾウムシ類の加害に関する一観察
- 高知大学農学部 高知大学農学部紀要 第6号 1959
- 小島 圭三:日本産カミキリの幼虫の形態学的研究 附 2, 3のカミキリムシの生態について
- 岡山大学 大原農業生物研究所 農学研究 第46巻 第4号
- 西門義一・渡辺清志・井上成信:ヤマハシノキ芽枯病
- 編集後記:100号を超えたと思つたらもう102号になりました。大分遅れています。本号は病虫獣の夫々を取り上げましたが薄いものになってしまいました。これもひとえに編集者の至らなさのためです。これで遅れを取り戻すようにして、今後より良い編集企画の上、読者諸氏の満足のいくように努力したいと思います。尚、諸賢の御意見並びに御支援をお願いします。(編集幹事)